

# 社会的な役割取得による インターネット活用モラル向上のための学習プログラム開発

香南市立野市中学校 教諭 堀本 高志

## 1 はじめに

今日、インターネットの利用が急速に広まり、社会全体の情報化や電子化が進むにつれ、電子ネットワーク世界と日常世界の関連が濃密となり、これによって、日常世界の様々な事象や問題が電子ネットワークの世界に入り込むようになってきた。そのため、その匿名の得やすさを起因とする無責任な発言、誹謗、中傷、個人のプライバシーの侵害、他人へのなりすまし行為等、様々な問題が起こっており(越智 2004)、警察庁の「サイバー犯罪の検挙状況(2007)」でも、情報通信ネットワークを利用した場合における、利用者のモラルに起因するトラブルの発生が、ここ2～3年、加速度的に増えている傾向にあることが報告されている。

文部科学省は、「情報社会で適正な活動を行うための基になる考え方と態度」を「情報モラル」として示している(2004)。これは、情報化社会で生活していくには、情報化社会で適正な行動をするものとなる考え方と態度を学び、それを行動化していくことを表している。なかでも、情報通信ネットワークを介したコミュニケーションでは、しばしば通信先の相手(人間)の存在を忘れて、自分の目の前にある情報端末という機械に対して応答しているという錯覚に陥ることが往々にしてある。通信相手が人間であるか機械であるかを手段や場面に応じて区別するとともに、情報の収集や発信といったコミュニケーション活動が基本的には“人と人とのコミュニケーション”であることを常に意識し、日常のモラルを適用していかなければならない。そのうえで、情報の送り手と受け手との間で、文化的あるいは社会的な環境や考え方にそれぞれ違いがあることや、利用する情報機器など技術的な環境にも違いがあることに配慮し、加えて互いの人権に配慮する必要があるのである。これらのコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報技術の特性、および、それらの利用による文化的あるいは社会的なコミュニケーションの範囲や深さなどが様々な変化する特性をふまえた日常生活上のモラルを身に付け、適正な活動を行うための考え方と態度の育成を「情報モラル」として求められているのである。これについて越智ら(2000)は、「情報社会におけるモラルといえども日常のモラルに支えられている」と述べており、ネットワークを活用する人間も、あくまでも普段は日常生活のなかで生きているということを考えた場合、日常生活で高いモラルを持っている人は、ネットワーク上においても高いモラルを持って活用することは容易であろうと考えられる。つまり、情報ネットワーク上のモラルは日常のモラルに基づきかつ支えられてこそ実になるものであり、「情報モラル」の育成もあくまでも日常のモラルの育成の延長上にあらねばならないのである。

## 2 研究の目的

文部科学省は「児童生徒の問題行動対策重点プログラム(最終まとめ)」(2004)の中で、「情報モラル」の育成について、安全教育の側面とモラル教育の側面と両面の充実を挙げている。学校現場において、この2つの側面のうち、安全教育の側面は知識・理解の占める割合が高いため比較的授業として計画実施しやすく、効果もある程度望める。また、公共団体による、授業ですぐに使えるウェブページ教材の提供も少なくなく広く活用されている。

これらのウェブ教材のなかにはモラル教育の側面の教材もいくつかあるが、一人ひとりが1台の情報端末に向かい、実際にありそうな事例を疑似体験しながら個別に知識・理解の習得を目的として制作されているものがほとんどであるため、テレビゲーム感覚に陥りやすく、個人と個人、あるいは集

団での交流場面が持ちにくい。そのため、筆者が実際に現場で活用した経験からも、モラル学習の基となる“倫理観”の育成に必要な“心の動き”が生み出しにくく、モラル教育の側面としての効果は弱いと言わざるを得ない。果たして、多くの学校現場で行われているモラル教育の側面は、実際の道徳教育の現場でも多く見られるように、徳目や社会的規範の教え込みの域を出ていない場合が多いのが現状である。

そのようななか、近年、教科道徳をはじめとするモラル教育の場面で注目されている教育相談の手法を活かした体験的な学習がある。この教育相談の手法を活かした体験的な活動には、心の問題にかかわる要素が多く含まれており、生徒が自分自身で自分なりの道徳的価値を創造、発見するような、あるいは実感するような授業に活用できるものが多い。これらの手法には「構成的グループエンカウンター」「プロジェクトアドベンチャー」「グループワークトレーニング」「ソーシャルスキルトレーニング」などがあり、共通する特徴として、体験的な活動が中心になっており、そこで受けた実感や気づきを重視していることと、その体験的な活動で受けた感じや気づきを振り返ったり分かち合ったりする活動がセットになっていることが挙げられる。この一連の活動において、互いの本音を語り合い、認め合うことが自分の得た認知を拡大・修正することにつながっている。

しかし、効果がある程度期待できるこれらの教育相談の手法を活かした体験的なモラル学習が、実際の学校現場において、旺盛に浸透しているとは言い難い実感がある。それは、これらの手法を用いた場合、指導に長けた教師が授業するのと、あまり経験のない教師が授業するのとでは、その教育効果に大きな差ができてしまうという指導者に起因する問題であると考えられる。これは、2007年に筆者が現場の教員に聞き取り調査したなかにも「うまく授業できたら良い効果を生むだろうが、うまくできるかどうか不安」という教師の声にも表れており、指導者が感じている導入への不安感といえる。実際、様々な研究で体験をもとにした学習が取り入れられているが、筆者の調べる限り、指導者の力量を高めることが前提となっている。

そこで本研究の目的は、教師の指導力の差で学習効果に差が生じる不安感を比較的抱きにくい手法であろうと考えられる、行動理論をベースとしたトレーニング（訓練）的活動が中心の、ソーシャルスキルトレーニングに注目し、中学生を対象とした「情報モラル」育成の学習活動に取り入れ、教師が状況に応じて応用しながら使える教材を開発し、それを用いた家庭への働きかけを含め、インターネット活用モラル向上に向けての学習プログラムとして具現化することとした。

### 3 研究内容

#### (1) 研究の方法

本研究は、「情報モラル」のモラル教育の面を育成する学習教材を開発し、中学生の家庭のかかわりを含めた学習モデルをもとにした学習プログラムを提案する。そのうち、学習教材の開発は中学生を対象とし、教育活動全般で応用できるようモジュール化する。そして、具体的な活用を想定し、情報社会で一般的に起こりうる事例を題材に用いた指導案とワークシートに、評価規準を添付した形で作成する。開発した教材を用いて「情報モラル」育成のための授業を中学校で実践し、教材の有効性を多角的に検討する。そしてこの結果をふまえ、保護者の中学生への関わりを支援するとともに開発した学習教材を用いた学習プログラムを提案するものとする。

#### (2) 学習モデルの構築

和田（2005）は、小学生を対象に“親子の関わり”で「情報モラル」を育成するための学習モデルを考案した。そこでは、“親の価値観の子への伝承”を中心にして「情報モラル」学習をするモデルとして考えられており、学校は親子の学びを直接的にサポートするという立場をとっている。しかし、本研究の対象である中学生は、第二次性徴を迎えるとともに、身体的に大きく成長する時期であり、大人への過渡期にさしかかる時期といえる。自らを取り巻く人間関係が急速に拡大するとともに、両親からの心理的な自立や、友人との相互作用を求めるようになり、親子および友人関

係も徐々に向社会的なものに質的に変化していく時期なのである。小学生対象である和田(2005)の学習モデルをそのまま当てはめることはできない。

そこで、「心理学者ホフマンは、共感性を含む道徳的認知や感情、動機づけの内在化の中心的な先行経験は社会化、特に“大人の介入という形式での社会化(しつけ)”であるとした」(田中ら 2006)こともふまえ、中学生の心と体の成熟を考慮した学習モデルを考案した(図1)。

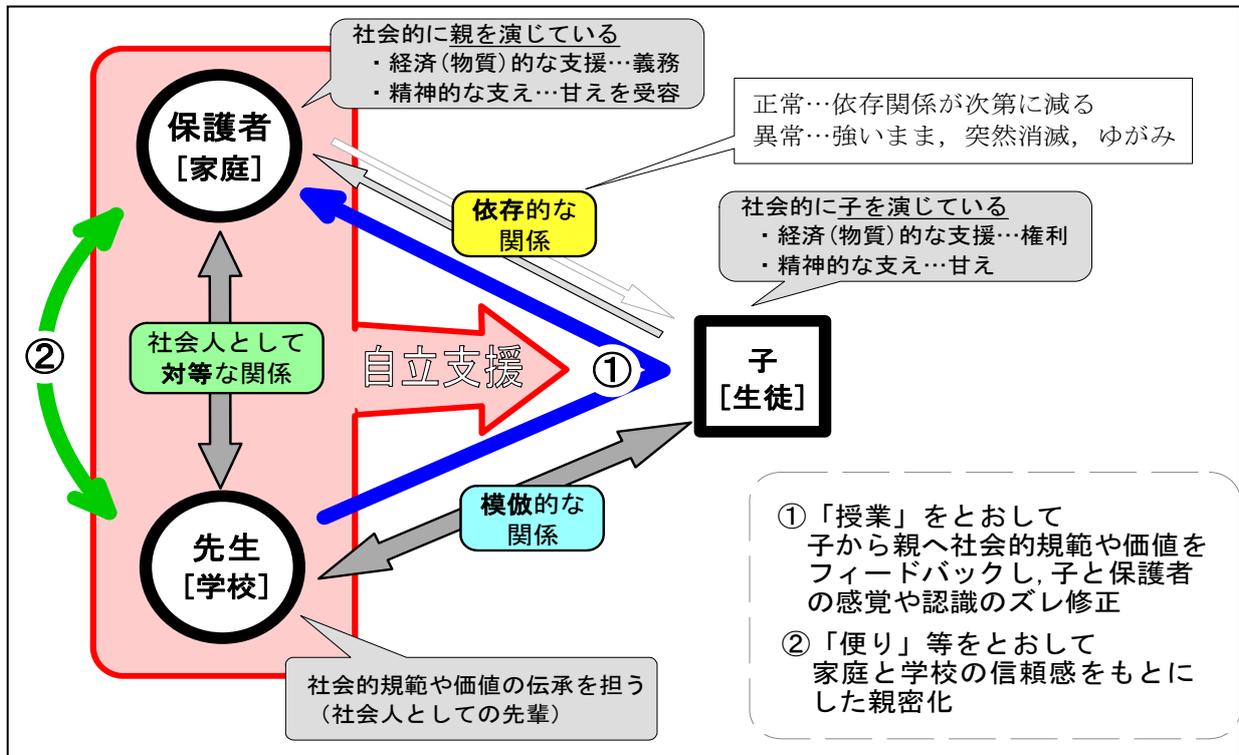


図1 中学校における「情報モラル」学習モデル図

### (3) 学習教材の開発

インターネット利用における、中学生の「情報モラル」に関連するトラブル行動の要因には様々なものが挙げられるが、その一因として、罪悪感や共感性を含めた役割取得能力が適切に働いていないことが考えられる。石川・内山(2002)は「タングニーは罪悪感を、反社会的行動や不道德な行為から引き起こされる後悔や自責の念であり、適切に機能した場合、ひとにその悪事を償うような謝罪の気持ちや行為を動機付けるのであるとしている。このことから、罪悪感はその子どもの社会化に必要な要因として考えられる」と述べ、さらに、罪悪感と共感性および役割取得能力との関係を明らかにする過程で、「規則を逸脱した行為による罪悪感には、自分の視点からではなく、他者あるいは社会の視点から内省するという、社会的視点取得能力の側面が密接に関係している」と述べている。これらのことから、青年期の入り口にあたる中学生に、社会的な役割取得能力を身に付ける働きかけをすることが、「情報モラル」のモラル面を向上させることにつながると考えた。

そこで前述した、トレーニングという形態をとり、組み込むべき活動を手順良く実施すれば、比較的指導者による教育効果の差が出にくい教育相談の手法を用いた体験的な学習であるソーシャルスキルトレーニングの手法を用い、中学生の社会的な役割取得能力を育成するための学習教材を開発することとした。また、開発する学習教材は、ねらいや手法といった骨子を「モジュール」化して提供することとし、さらに、その活用例として、具体的な教材の形にしたもの(学習指導案とワークシート)を添付することにした。これは、教師が授業をする際、添付の活用例を参考にして、自らの授業にモジュールとして組み込むことにより、様々な教科や題材に対応できるようにするためである。また、改良や工夫の余地を持たすことは自由度が増し、授業にも組み込みやすくなると

考えたからである。

(4) 評価規準の作成

セルマンは「役割取得能力」が認知的な発達をふまえて高まるとして、次の5段階の発達段階を提示している(表1)。

表1 セルマンの役割取得能力の発達段階(渡辺 2001)

<b>レベル0：自己中心的役割取得（3～5才）</b> ----- 自分と他者の視点を区別することが難しい 同時に、他者の身体特性を心理面と区別するのが難しい
<b>レベル1：主観的役割取得（6～7才）</b> ----- 自分と他者の視点を区別して理解するが、同時に関連づけることが難しい。また、他者の意図と行動を区別して考えられるようになり、行動が故意であったかどうかを考慮するようになる。ただし、「笑っていれば嬉しい」といった表面的な行動から感情を推測しがちである
<b>レベル2：二人称相応的役割取得（8～11才）</b> ----- 他者の視点から自分の思考や行動について内省できる。また、他者もそうすることができることを理解する。外からみえる自分と自分だけが知る現実の自分という2つが存在することを理解するようになる。したがって、人と人とがかかわるときに他者の内省を正しく理解することの限界を認識できるようになる
<b>レベル3：三人称的役割取得（12～14才）</b> ----- 自分と他者の視点以外、第三者の視点をとることができるようになる。したがって、自分と他者の視点や相互作用を第三者の立場から互いに調整し考慮できるようになる
<b>レベル4：一般化された他者としての役割取得（15～18才）</b> ----- 多様な視点が存在する状況で自分自身の視点を理解する。人の心の無意識の世界を理解し、主観的な視点をとらえるようになり、「言わなくても明らかな」といった深いところで共有される意味を認識する

このセルマンの発達段階では、中学生は「レベル3」の「三人称的役割取得」に相当する。そこで、次の5つの観点を設定し、「記述面」(表2)と「行動面」(表3)に分けて生徒の社会的な役割取得能力の評価規準を作成した。

- 他者理解(共感性を含む)
  - …自分を他者の立場に置き、他者の考えを想像したり、他者の感情を得たり、自分と他者との同じ点や相違点を認識することによって他者理解を深める
- 自己理解(他者からのフィードバックによるものを含む)
  - …他者の視点から自分を見つめる、あるいは他者からのフィードバックにより自己認識を深める
- 自己の役割や立場の理解
  - …他者と自分の関係を考えることにより、自分の置かれている立場を理解する
- 責任の自覚
  - …自分の行動がもたらす社会的な影響を認識する
- 多角的なものの見方
  - …様々に立場を変えて物事を見ることにより、多角的なものの見方ができる

また、評価段階は学校現場で馴染みやすい3段階とし、「レベル3」に達しているとみられる生徒を「平均的(B)」とした。

表2 記述面の評価規準表（一部を抜粋）

観 点	評 価	
<b>他者理解</b> …共感性を含む	優れている (A)	・理由を含めて他者の考えを理解するような記述 ・他者の気持ちを代弁するような記述 ・自分と他者の同じ点や相違点を明確に示している記述
	平均的 (B)	・「たぶん〇〇〇だと思う」といった単純な推測 ・見たまま聞いたままの他者に対するの記述 ・自分の考えが中心の記述
<b>自己理解</b> …他者からの フィードバックに よるメタ的な認知 を含む	優れている	・自分を他者の視点でとらえた記述 ・他のメンバーの自分に対する発言から自分をとらえた記述
	平均的	・自分を内側からしか見ていない記述 ・他人から見た自分を拒絶するような記述

表3 行動面の見取りによる評価規準表

行 動 (表情や態度)	直接参加 (発表者やグループリーダー)	周辺参加 (直接参加者以外)
優れている	・盛んに意見交換をしている ・発言者の方を向いて頷く ・まとめた意見を自分のものとして発表している	・盛んに意見交換をしている ・発言者の方を向いて頷く
平均的	・発言者の方をあまり向かない ・他人の意見を中心にまとめようとする ・自分を含めたメンバーの意見どうしを比べて調整するような働きかけをしていない	・発言者の方をあまり向かない ・他のメンバーの意見と自分の意見を較べた発言をしていない

(5) 予備授業

教材を用いた授業を実践するにあたっては、まず生徒の情報端末の利用実態調査を行い、次に試作教材をチェックする目的で、予備授業を行った。また並行して、実態調査の集計結果を PTA 新聞で家庭にフィードバックし、家庭の反応を調査したうえで学校からの支援方法の検討も行った。

授業後にチームティーチングを担当した技術科教諭への聞き取りを行った。そのなかで、ワークシートの妥当性は確かめられたが、評価規準は抽象表現の多い観点別の一覧表よりワークシートに沿った具体的な評価規準が望ましいことが提案された。そこで、指摘された評価規準の具体性を、それまでの評価規準表にワークシートごとの具体的な評価規準を「予想される生徒の反応」として加える形で行い、授業実践に臨んだ。

(6) 授業実践による学習教材の評価と考察

授業実践にあたって、学級担任が Q-U をもとに「要支援」またはそれに近く、実態調査による情報端末の利用および依存度の高い生徒を抽出し、授業後、その生徒たちのワークシートの記述の評価と行動の見取りを教科担当と筆者とで比較することで、評価規準の妥当性を検討した。また、モジュール教材の実用性を検討するために、教科担当と学級担任に聞き取り調査を行った。

結果、教科担当と筆者の評価に差が見られなかった（記述面 8/9、行動面 1/1）ことで、「他者理解」と「自己の責任の自覚」の2つの観点の評価規準の信憑性が高いことが示唆された。また、ワークシート自体の実用性は、聞き取り調査により、題材の設定が生徒の現実に即して授業教材として有効であったということが認められたが、モジュール教材としては応用のイメージがしづらいという指摘があったため、協議した結果、モジュールの分類を観点別から、「情報モラル」を活用すべき場面別に分類し直すこととした。

#### 4 まとめ

今回開発した学習教材は、生徒に何を目的としている学習なのかがよく伝わるものであると教科担当に評価をもらった。このことから、ワークシートは、授業教材として有効であるという実用性が確認された。今後さらにモジュールの各場面の活用例のバリエーションを増やしていき、より内容の充実した学習教材にしていきたい。また、今回モジュールをインターネット活用を中心とする「情報モラル」育成のために設定した、社会的な役割取得能力の育成における5つの観点に分類・構成し作成していたが、「観点別では応用しづらい」と、「応用面で難がある」という指摘があった。今回の授業者および学級担任と協議した結果、「場面を設定するほうが授業する立場としてはイメージしやすい」ということになり、モジュールの分類を観点別からインターネット活用を中心とした“「情報モラル」を活用すべき場面”で分類、レイアウトすることが提案された。そこで、既出の5つの観点をもとに、「情報モラル」を活用すべき場面を設定し、それを基にモジュールを再分類した(資料参照)。

表4 「情報モラル」を活用すべき場面

①他者の立場で考えて行動する場面
おもに含まれる観点： 他者理解, 自己理解
②他者と自分の関係を考えて行動する場面
おもに含まれる観点： 他者理解, 自己理解, 自己の役割や立場の理解
③役割を考えて行動する場面
おもに含まれる観点： 自己の役割や立場の理解, 他者理解, 自己理解
④責任を自覚して行動する場面
おもに含まれる観点： 責任の自覚, 他者理解, 自己理解
⑤ものごとを多角的にとらえて行動する場面
おもに含まれる観点： 多角的なものの方, 他者理解, 自己理解

また、評価規準の5つの観点のうち、今回実施したモジュール内容の制約により、2つの検討を行ったが、それら観点については、授業者と筆者の二者間でほぼ評価に相違がなかったため、評価規準の信頼性が示唆されたといえる。

今後の課題として、残り3つの評価観点の信頼性についての検討がある。モジュール教材を用いた授業を重ねていきたい。また、本研究では学習プログラム開発のうち、学習教材を中心に開発を進めたが、これは、学校現場から離れたところからでは直接的な家庭の反応が分りづらく、フィードバックの効果的な方法がとれなかったためである。学校現場で、考案した学習モデルに基づいた家庭へのフィードバック方法についても検討し、学習プログラム全体の完成をめざしたい。

引用・参考文献（アルファベット順）

- 阿濱茂樹、西野和典、高橋参吉、松浦正史『中学校における情報倫理教育について－学習モデルと教育方法の検討－、教育システム情報学会研究報告、Vol. 2001 No. 3』教育システム情報学会情報教育研究部会、2001年
- 荒木紀幸編『モラルジレンマによる討論の授業 中学校編』明治図書出版、2002年
- 土橋臣吾『携帯インターネット利用の日常性』武蔵工業大学 環境情報学部 情報メディアセンタージャーナル、2003. 4、第4号、2003年
- 林泰成『道徳教育における他律から自律への発達図式についての哲学的検討』上越教育大学研究紀要、第25巻、第1号、2005年
- 兵庫県立教育研修所、ひょうごe-スクール、<http://www.hyogo-c.ed.jp/manabi/index.html>
- 石川隆行・内山伊知郎『青年期の罪悪感と共感性および役割取得能力の関連』発達心理学研究 2002、第13巻、第1号、12-19、2002年
- 情報教育学研究会情報倫理研究グループ『インターネットの光と影 Ver. 2 被害者加害者にならないための情報倫理入門』北大路書房、2003年
- 火曜の会、やってみよう、情報モラル教育、<http://www.kayoo.org/moral-guidebook/index.html>
- 警察庁『平成19年上半期のサイバー犯罪の検挙状況等について』広報資料、2007年
- 國分康孝『構成的グループエンカウンター事典』図書文化社、2004年
- 宮田仁、石原一彦『小学生を対象とした情報モラル教育の試み～問題点を意図的に埋め込んだ Web 教材の活用～』、日本教育工学雑誌 25:167-172、2001年
- 水谷雅彦、越智貢、土屋俊編『情報倫理の構築』新世社、2003年
- 文部科学省『情報教育の実践と学校の情報化～新 情報教育に関する手引～』、2002年
- 文部科学省『「情報モラル」指導実践キックオフガイド』、2007年
- 文部科学省『「情報モラル指導モデルカリキュラム」の策定について（学校全体での体系的な情報モラル教育の取組のために）』、2007年
- 文部科学省、情報モラル等指導サポート事業、[http://sweb.nctd.go.jp/g\\_support/index.html](http://sweb.nctd.go.jp/g_support/index.html)
- 森広清一郎、安木良、正司和彦、西村治彦『電子メール経験のポートフォリオ化による情報モラル育成のための学習支援システム開発に向けた授業実践』日本教育工学雑誌、Vol. 27:109-112、2004年
- 諸富祥彦、齋藤優『エンカウンターで道徳 中学校編』明治図書、2002年
- 永野重史『道徳性の発達と教育－コールバーグ理論の展開－』新曜社、1985年
- 西俊之、本郷健『児童の発達と情報モラル教育の適時性に関する研究－日常場面のモラルから情報機器活用場面のモラルへの学習の転移の可能性－』、日本教育情報学会 教育情報研究 21No. 2:3-1、2005年
- 越智貢『情報モラルと日常モラルの差異に関する研究－教育倫理学の観点から－』文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、2003年
- 越智貢『情報倫理学入門』ナカニシヤ出版、2004年
- 岡山県教育センター『小学校高学年・中学校 道徳の時間における教育相談の手法の活用に関する考察』研究紀要 272号、2006年
- 田中あかり・岩立京子『母親の幼児に対する「言葉かけ」が幼児の共感性に及ぼす影響－ポジティブ感情の共感に注目して－』、東京学芸大学紀要 総合教育科学系 57、pp. 63-70、2006年
- 和田泉『親子で学ぶ情報プログラムの開発－親子の関わりを通して育まれる情報モラルに対する意識の芽生え－』上越教育大学修士論文、2005年
- 渡辺弥生『ソーシャルスキル・トレーニング(講座サイコセラピー第11巻)』日本文化科学社、1996年
- 渡辺弥生『VLFによる思いやり育成プログラム(「こころの教育」実践シリーズ②)』図書文化社、2001年

**この教材は、中学生の「情報モラル」育成における“安全教育”面と“モラル教育”面のうち、“モラル教育”の側面を支援する教材です。**

情報社会でモラルを問われるいろいろな場面を「社会的な役割取得能力の向上」の観点を基に設定し、そのときの振る舞いや考え方をトレーニングします。この役割取得能力は、アメリカの心理学者セルマンが提唱した「相手の気持ちを推測し、理解する能力」のことです。この能力を育成すれば、匿名性の高い情報ネットワークを利用する場面においても、情報ネットワークの先にいる人の存在を意識した行動がとれるようになると考えました。

セルマンは役割取得能力を、幼年期から青年期まで発達に応じて5段階あるとしており、中学生はそのうちの「レベル3：三人称的役割取得」という段階にあたるとしています。それは「自分と他者以外の第三者の視点をとることができる」ようになり「自分と他者の視点や相互作用を第三者の立場から互いに調整し考えることができる」ようになる時期なのです。

<b>レベル0：自己中心的役割取得（3～5才）</b>
自分と他者の視点を区別することが難しい。
<b>レベル1：主観的役割取得（6～7才）</b>
自分と他者の視点を区別して理解するが、同時に関連づけることが難しい。
<b>レベル2：二人称相応的役割取得（8～11才）</b>
他者の視点から自分の思考や行動について内省できる。また、他者もそうすることができることを理解する。外からみえる自分と自分だけが知る現実の自分という2つが存在することを理解するようになる。
<b>レベル3：三人称的役割取得（12～14才）</b>
自分と他者の視点以外、第三者の視点をとることができるようになる。したがって、自分と他者の視点や相互作用を第三者の立場から互いに調整し考慮できるようになる
<b>レベル4：一般化された他者としての役割取得（15～18才）</b>
多様な視点が存在する状況で自分自身の視点を理解する。人の心の無意識の世界を理解し、主観的な視点をとらえるようになり、「言わなくても明らかな」といった深いところで共有される意味を認識する

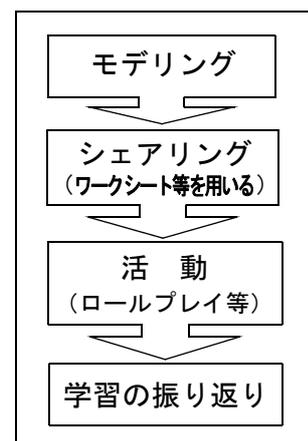
**教**材は、社会的な役割取得能力の発達段階より設定した**観点**を基に、次の5つの「情報モラルが求められる場面」に分類しました。

- ①他者の立場で考えて行動する場面
- ②他者と自分の関係を考えて行動する場面
- ③役割をを考えて行動する場面
- ④責任を自覚して行動する場面
- ⑤ものごとを多角的にとらえて行動する場面

●それぞれの場面には、おもな**観点と具体的な場面例**、そして**学習活動の流れをモジュール**として示してあります。それらに**ワークシートを用いた活用例**（モジュールを組み合わせて1時間の授業としたもの）を**学習指導略案と評価規準**とともに教材として2例ずつ添付しました。

次ページに、ワークシート等の**記述における観点別の評価規準**と、それを補足する授業中の**行動の評価規準**を表にまとめて掲載してありますが、それぞれのワークシートには、具体化した評価規準として「予想される生徒の反応」を記載しています。

●学習の流れは、**ソーシャルスキルトレーニング**の手法をおもに参考にしました。ソーシャルスキルトレーニングは、「こんなときどうする」「こんなときどう考える」といった、どう行動するかをトレーニングするもので、教師や友人の言動を**モデリング**（まね）したり、他者の考えと自分の考えの照らし合わせ（**シェアリング**）をすること等によって、トレーニング内容を自分のものにしていくものです。



目標を持ち、手順を守って繰り返し実施すれば必ず効果が出るのがトレーニングの良いところなのです。

とき  
モラルな場面  
～社会的な役割取得によるインターネット活用「情報モラル」育成教材～

評価規準表

【行動の評価基準】

行動 (表情や態度)	直接参加 (発表者やグループリーダー)	周辺参加 (直接参加者以外)
優れている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盛んに意見交換をしている</li> <li>・発言者のほうを向いて頷く</li> <li>・まとめた意見を自分のものとして発表している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・盛んに意見交換をしている</li> <li>・発言者のほうを向いて頷く</li> </ul>
平均的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発言者のほうをあまり向かない</li> <li>・他人の意見を中心にまとめようとする</li> <li>・自分を含めたメンバーの意見どうしを比べて調整するようにはたらかけをしていない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発言者のほうをあまり向かない</li> <li>・他のメンバーの意見と自分の意見を較べた発言をしていない</li> </ul>

【記述の評価基準】

観 点	評 価	
<b>他者理解</b> …共感性をふくむ	優れている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・理由を含めて他者の考えを理解するような記述</li> <li>・他者の気持ちを代弁するような記述</li> <li>・自分と他者の同じ点や相違点を明確に示している記述</li> </ul>
	平均的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「たぶん○○○だと思う」といった単純な推測</li> <li>・見たまま聞いたままの他者に対する記述</li> <li>・自分の考えが中心の記述</li> </ul>
<b>自己理解</b> …他者からのフィードバックによるメタ的な認知をふくむ	優れている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を他者の視点でとらえた記述</li> <li>・他のメンバーの自分に対する発言から自分をとらえた記述</li> </ul>
	平均的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分を内側からしか見ていない記述</li> <li>・他人から見た自分を拒絶するような記述</li> </ul>
<b>自己の役割や立場の理解</b>	優れている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者と自分の関係を考え判断している記述</li> <li>・置かれている立場や役割を考えた記述</li> </ul>
	平均的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分と他者との関係が自分中心に偏っている記述</li> <li>・役割と立場のどちらかが欠けた記述</li> </ul>
<b>責任の自覚</b>	優れている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会的な影響を考えた行動選択している記述</li> <li>・行動には責任が付属していることを自覚している記述</li> </ul>
	平均的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・責任より行動する自由を選択している記述</li> </ul>
<b>多角的なものの見方</b>	優れている	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な立場を変えて物事をとらえている記述</li> <li>・いろいろな可能性を冷静に考慮した記述</li> </ul>
	平均的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・立場が自分中心に偏っている記述</li> <li>・自分の都合の良いように可能性を解釈した記述</li> </ul>

**この教材は、1年間や2年間といった長いスパンで「情報モラル」をトレーニングするものです。**

**1回の授業で生徒の「社会的な役割取得能力」をはじめ「情報モラル」のモラル度を育成・判定するものではありません。**

次のような“個人評価カルテ”を作成し、生徒の成長の過程を記録確認すると効果的な指導に結びつけることができます。

年 組・名前						
実施日	ワークシート名 (題材名)	他者 理解	自己 理解	役割や立 場の自覚	責任の 自覚	多角的な 見方
4/25	2人そろっての応募	B			C	
5/24	かっこいいお兄さん		B	C		
6/30	使いすぎた携帯電話	B		C		
7/16	ネットゲーム	B		B		
10/ 5	傷ついた心	A			B	
11/15	モデルになりませんか			B		B
/						
/						
/						

## 目次

- ① 他者の立場で考えて行動する場面 …> 6 – 13
- ② 他者と自分の関係を考えて行動する場面 …> 14 – 21
- ③ 役割を考えて行動する場面 …> 22 – 29
- ④ 責任を自覚して行動する場面 …> 30 – 37
- ⑤ ものごとを多角的にとらえて行動する場面 …> 38 – 45



# ① 他者の立場で考えて行動する場面

## モジュール

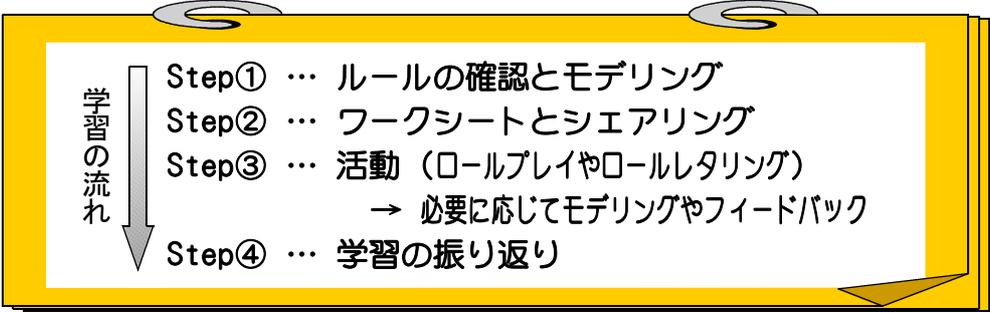
### 1. おもな観点

他者理解   自己理解

### 2. 場面設定の具体例（活用例を参照）

- ・インターネットでの懸賞応募      ・サイトの会員登録
- ・インターネットで知り合った友だち など

### 3. 学習の流れ



#### 具体的な学習の流れ

Step①	1. ルールの周知 ←「他人の意見を否定したりからかったりしない」など 2. 資料やワークシート課題文を読んで、指導者の経験や体験をからめながら、本時は具体的に何を学習するのかを示す
Step②	3. 他者の立場に立って考えワークシートに記入 4. となり同士やグループで意見や感想を交換する 5. グループで意見をまとめる 6. グループで発表の準備（練習）をする
Step③	7. 教師の問いかけに答えるようなロールプレイや意見、感想の発表 → 必要に応じて教師の経験や体験からのアドバイス
Step④	8. 教師や友だちの意見や発表の感想をワークシートに記入する

ロールタリングの場合はシェアリングをStep③の最後にする

### 4. 留意点

◇ ビデオ撮影をする場合は、からかいにつながらないよう留意する

① 他者の立場で考えて行動する場面

## 活用例

### 活用例 ①-1

○教科：技術・家庭科（技術分野）

○題材名：個人情報大切にしよう  
ワークシート「2人そろっての応募」

○本時の学習の目標：

- ・ 個人情報を大切に
- ・ 他者理解を深める
- ・ 自己の責任を自覚した行動がとれる

○展開：＜Step①→②→③→②→③→④＞

学習項目	学習活動	指導上の留意点	備考
本時の目標	・ 本時の学習目標を知る		
個人情報について	・ 個人情報を大切にする ことの大切さを知る	・ 実際に起こった事件を紹介する ・ 教師の経験や生徒の経験をたずねる	
情報モラル	・ ワークシートの題材文を読む	・ 場面設定をしっかり把握させるための補足説明	
他者理解	・ Q1を記入する ・ 班で意見を出し合う  ・ 班で意見をまとめる ・ 班で発表の練習をする	・ <b>他者理解</b> ・ 出た意見をからかわないなどのルールの確認  ・ 練習が終わったあとに代表を決める	ひとり1分 5分以内 3分以内
	・ 代表が発表する	・ ロールプレイ ・ 適宜アドバイスを入れる	
責任の自覚	・ Q2を記入する ・ 班で意見を出し合う ・ 班で意見をまとめる ・ 班で発表の練習をする	・ <b>責任を自覚した行動</b> ・ 理由も含めて  ・ 練習が終わったあとに代表を決める	ひとり1分 5分以内 3分以内
	・ 代表が発表する	・ ロールプレイ ・ 適宜アドバイスを入れる	
振り返り	・ 活動を振り返って本時のまとめをする	・ 個人情報の大切さと約束と責任について教示	
まとめ	・ ワークシートの〈まとめ〉を記入する		
次時の予告	・ 次時の予告	・ ワークシートを仕上げる	

① 他者の立場で考えて行動する場面

【2人そろっての応募】

年 組・名前

ある日、晴美さんは家でお気に入りのアニメのインターネットサイトを見ていました。そのなかのプレゼントコーナーに、キーホルダーのプレゼント応募があるのを見つけました。仲良しの香さんもこのアニメの大ファンです。2人でお揃いにしたいと思いました。さいわい応募の締め切りは明日でした。

次の日、香さんにそのことを話すと香さんも大喜びでした。香さんの家はインターネットにつながっていないので晴美さんがまとめて応募することを約束しました。

その夜、10時を過ぎたころ、やっと宿題を終えた晴美さんはパソコンに向かいました。自分の応募ページに記入して応募したあと、香さんのぶんも記入しようとしたが、住所や電話番号が分からないことに気が付きました。そこでお母さんにPTA名簿で調べてもらうことにしました。

晴美：お母さん、香ちゃんの家住所と電話番号を名簿で調べてよ。

母：そんなの調べてどうするの？

晴美：インターネットの懸賞に香ちゃんのぶんと一緒に応募するの。

お母さんの表情が曇りました。

晴美：だって一緒に応募するって約束しちゃったんだもん。それに今日が応募の締め切りなの。

母：〇〇〇〇〇。

明朝、学校に行くと香さんが駆け寄ってきて「キーホルダー、2人とも当たるといいね」と、うれしそうに言いました。

- Q1. 〇〇〇〇〇の部分、お母さんは何と答えたのだと思いますか？  
お母さんになったつもりで、しゃべるような言葉で書いてください。



- Q2. もしあなたが晴美さんなら、次の日香さんに「2人とも当たるといいね」と言われたあと何と答えますか？しゃべるような言葉で書いてください。  
また、そう答える理由も書いてください。



[理由]

<まとめ>友だちや先生の話聞いて、どんなこと感じたり、発見がありましたか？  
具体的に書いてください。

① 他者の立場で考えて行動する場面

○ワークシート「2人そろっての応募」の評価規準（予想される生徒の反応）

	評価*	予想される生徒の反応
Q 1 他者理解	A (優秀)	・いくら約束で今日が締め切りでも、だまって個人情報を発信するのはいけないから、明日きちんと説明して謝りなさい など
	B (普通)	・だまって個人情報を発信するのはいけないわ ・今から電話して直接香ちゃんから聞きなさい ・約束は守らなくちゃいけないから、明日、香ちゃんに名簿で見て応募したって言うておきなさい など
Q 2 責任の自覚	A (優秀)	・個人情報を勝手に発信しちゃいけないって気が付いて、香ちゃんのぶん応募するのあきらめちゃったの、約束破ってゴメン など
	B (普通)	・ゴメン、お母さんに個人情報を勝手に使って応募しちゃダメって言われて香ちゃんのぶん応募できなかったの(他者のせいにする) ・そうだね当たるといいね(応募していないのはバレない) ・応募できなかったの2人とも(自分だけ応募したのはバレない) など
まとめ	A (優秀)	・「○○○○○(理由)で〜〜〜がわかった」のように理由や原因を考えて書いているもの ・他人の考えと自分の考えを対比させたうえで自分の考えを決定しているようなもの ・活動を通じての自分の変化を認識して書いているもの
	B (普通)	・「○○○○○がわかった」的なもの ・「○○ちゃんの意見すごい」あるいは「〜最悪」的なもの ・他人の意見を全く聞いていないもの

※ 評価Cは要支援生徒と見とれる生徒、「無記入」は授業態度での評価のみ  
「活動をまったくしない」は評価できない

○授業での行動（授業態度や表情）の評価規準

評価	直接参加 (発表者やグループリーダー)	周辺参加 (直接参加者以外)
A (優秀)	・メンバーの意見を引き出す努力が見られる ・他のメンバーの顔をよく見てうなづきながら聞いている ・皆でまとめた意見を自分のものとして発言している	・自分が発表するつもりで協力的に意見を出している ・他のメンバーの顔をよく見てうなづきながら聞いている
B (普通)	・出た意見だけをまとめている ・発表しても自分の意見になっていない ・発言者のほうをあまり見ない	・自分の言う番のときは意見を言うが他のメンバーの意見は聞いていない ・発言者のほうをあまり見ない

① 他者の立場で考えて行動する場面

活用例 ①-2

○教科：技術・家庭科（技術分野）

○題材名：インターネットの闇の部分  
ワークシート「かっこいいお兄さん」

○本時の学習の目標：

- ・インターネットの危険性の認識
- ・相手のことを考えることで自己理解を深める
- ・自分の立場と役割を考えた行動

○展開：＜Step①→②→③→②→③→④＞

学習項目	学習活動	指導上の留意点	備考
本時の目標 インターネットの 闇の部分 情報モラル	<ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の学習目標を知る</li> <li>・インターネットの闇の部分を知る</li> <li>・ワークシートの題材文を読む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際に起こった事件を紹介する</li> <li>・教師の経験や生徒の経験をたずねる</li> <li>・場面設定をしっかり把握させるための補足説明</li> </ul>	
自己理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Q1を記入する</li> <li>・班で意見を出し合う</li> <li>・班で意見をまとめる</li> <li>・代表が発表する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己理解</li> <li>・出た意見をからかわないなどのルールの確認</li> <li>・代表を決める</li> </ul>	ひとり1分 5分以内
自己の 役割や 立場の 理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Q2を記入する</li> <li>・班で意見を出し合う</li> <li>・班で意見をまとめる</li> <li>・班で発表の練習をする</li> <li>・代表が発表する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適宜アドバイスを入れる</li> <li>・立場と役割を考えた行動</li> <li>・理由も含めて</li> <li>・練習が終わったあとに代表を決める</li> <li>・ロールプレイ</li> <li>・適宜アドバイスを入れる</li> </ul>	ひとり1分 5分以内 3分以内
振り返り まとめ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・活動を振り返って本時のまとめをする</li> <li>・ワークシートの〈まとめ〉を記入する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出会い系の危険と自分の立場と役割の自覚の教示</li> </ul>	
次時の予告	・次時の予告	・ワークシートを仕上げる	

① 他者の立場で考えて行動する場面

【かっこいいお兄さん】

年 組・名前

○ある金曜日、部活が終わっての帰り、久美子さんは仲良しの紫乃さんからこんなことを打ち明けられました。

久美子：私、携帯サイトのメル友募集で知り合った大学生に、進路の相談に乗ってもらっているんだ。

紫乃さんは驚きました。そんなことは初めて聞くことだったからです。

久美子：でね、その人はこんな感じの人。

そう言いながら、とてもうれしそうに携帯電話に保存したメールの写真を紫乃さんに見せました。その大学生は写真で見るととてもかっこいいお兄さんでした。

久美子：実はねえ、その人から明日の土曜日会わないかっていわれているの。会っていろいろ進路のことを話したいんだって。

そのあと、久美子さんはうれしそうに顔をちょっと曇らせてこう続けました。

久美子：でも、会うのはちょっと不安なの。紫乃ちゃん、どうしたらいいと思う？

紫乃さんは一瞬答えに詰まりましたが、すぐに言い聞かせるように言いました。

紫乃：会うに決まってるじゃん。会ってみなよ、絶対会うべきだって。

日曜日の朝、家でテレビを見ていた紫乃さんは、お母さんから、久美子さんが土曜日家に帰ってこなかったのを両親が警察に捜索願いを出したと聞かされました。紫乃さんは取り返しの付かないことをしてしまったのではないかと思い始めました。

Q 1. 紫乃さんはなぜ久美子さんに、会うことを言い聞かせるように言ったのでしょうか？

Q 2. もしあなたが紫乃さんなら、久美子さんから相談されたときどう答えますか？しゃべるような言葉で書いてください。



<まとめ>友だちや先生の話聞いて、どんなことを感じたり、発見がありましたか？具体的に書いてください。

① 他者の立場で考えて行動する場面

○ワークシート「かっこいいお兄さん」の評価規準（予想される生徒の反応）

	評価*	予想される生徒の反応
Q 1 自己理解	A (優秀)	・うらやましい、ねたみのような気持ちがあった ・自分だったら、実際に会ってみたくても勇気がないため、かわりに会ってもらって仮想体験したい など
	B (普通)	・人ごとだから ・久美子に会ってもらって実物を見てみたいから ・かっこいい人なので自分なら会えたらと本気で思ったから (↑3番目は評価Cに近い) など
Q 2 自己の役割や立場の理解	A (優秀)	・○○○○○だから（理由）、やめたほうがいいよ ・○○○○○なのに（理由）、あぶないよ など
	B (普通)	・（単純に）やめたほうがいいよ ・（単純に）あぶないよ ・一緒に行きつづける（←評価Cに近い） など
まとめ	A (優秀)	・「○○○○○（理由）で〜〜〜がわかった」のように理由や原因を考えて書いているもの ・他人の考えと自分の考えを対比させたうえで自分の考えを決定しているようなもの ・活動を通じての自分の変化を認識して書いているもの
	B (普通)	・「○○○○○がわかった」的なもの ・「○○ちゃんの意見すごい」あるいは「〜最悪」的なもの ・他人の意見を全く聞いていないもの

※ 評価Cは要支援生徒と見とれる生徒、「無記入」は授業態度での評価のみ  
「活動をまったくしない」は評価できない

○授業での行動（授業態度や表情）の評価規準

評価	直接参加 (発表者やグループリーダー)	周辺参加 (直接参加者以外)
A (優秀)	・メンバーの意見を引き出す努力が見られる ・他のメンバーの顔をよく見てうなづきながら聞いている ・皆でまとめた意見を自分のものとして発言している	・自分が発表するつもりで協力的に意見を出している ・他のメンバーの顔をよく見てうなづきながら聞いている
B (普通)	・出た意見だけをまとめている ・発表しても自分の意見になっていない ・発言者のほうをあまり見ない	・自分の言う番のときは意見を言うが他のメンバーの意見は聞いていない ・発言者のほうをあまり見ない